



DAIDO CAMPUS

No.80 2013.12



写真提供:アルバム委員会



大同大学創立50周年記念事業

50周年記念 ロゴマーク・バスデザイン決定! 入賞者授賞式を行いました



各デザイン、10人が入賞。澤岡昭学長より、1人ひとりに賞状と賞金が手渡されました。澤岡学長は、入賞作品のパネルを見ながら、選定の経緯や学長お気に入りの作品についてコメントしました。ロゴマークデザインで最優秀賞

大同大学は、2014年に大学創立50周年を迎えます。

11月13日(水)、創立50周年記念事業の一環として本学学生に募集した「50周年記念ロゴマークデザインコンテスト」と「バスデザインコンテスト」の入賞者授賞式を行いました。

を受賞した川端一樹さん(情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻4年)と、バスデザインで最優秀賞を受賞した伊藤久祥さん(同4年)は、「まさか自分が最優秀賞に選ばれるとは思っていなかった」、「良い経験になった」など、受賞の喜びをコメントしました。



最優秀賞に輝いたロゴマークは、50周年事業のあらゆる場面に使用され、またバスデザインは大同大学同窓会から寄贈される大型バスのデザインとして使用されます。

学生作品『展示室』が完成 オープニングセレモニーを開催しました



11月6日(水)、創立50周年記念事業の一環として、大同大学後援会から設置資金を寄贈いただき完成した『展示室』のオープニングセレモニーを行いました。

佐合孝史後援会会長と澤岡昭学長の挨拶後、テープカット。展示室内が開放され、本学50年のあゆみを紹介した映像が流されたほか、50周年記念で募集し



た「ロゴマーク」と「バスデザイン」の優秀作品を展示・発表しました。

展示室は、本学学生の教育・研究・制作・社会活動にかかる展示等に使用することができる空間として活用していきます。

大同町駅ジャック!

「創造と挑戦、～50年の歩み、そして更なる飛躍～」が50周年記念事業のスローガン。未来に向かって明るく挑戦し続ける、そんな学生たちの生き生きとした姿を感じていただけのはずです。



ロゴマークデザインコンテスト



最優秀賞

情報学部 情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
川端 一樹さん

大同大学を指す青・オレンジを主に置いた配色で製作し、一目で大同大学と分かるようにしつつ、50年間の成長・歴史を緑の植物を連想させるので表現しました。さらに、永遠に続く輪を表すために全体的に見て丸くなるようにしました。



金賞

情報学部 情報デザイン学科
かおりデザイン専攻4年
服部 純奈さん

大同大学のロゴを生かしつつ、「過去・現在・未来」を表現しました。そして、更なる飛翔という事で矢印を使用し、右上へ上げる事によって、未来へ羽ばたくイメージを入れています。



銀賞

工学部
電気電子工学科4年
藤田 耕太郎さん

50周年ということで真ん中に50の数字を配置。下の青と橙色のマークは大同大学のシンボルを応用し青が創造、橙が挑戦を示す。上が空いているのは「今いる大学で学びそこから更に飛躍していく」を意味する。

銅賞



情報学部 情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
深谷 匡志さん



情報学部 情報デザイン学科
メディアデザイン専攻3年
千田 崇史さん

佳作



情報学部 情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
伊藤 舞さん



情報学部 情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
竹市 有里さん



情報学部 情報デザイン学科
メディアデザイン専攻3年
渡辺 真伍さん

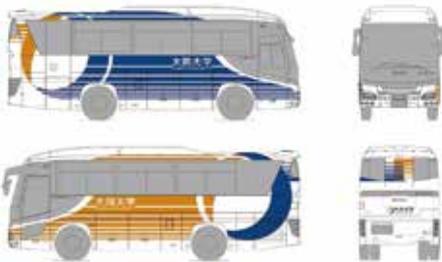


情報学部 情報デザイン学科
かおりデザイン専攻3年
土田 康平さん



情報学部 情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
松本 周作さん

バスデザインコンテスト



最優秀賞

情報学部 情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
伊藤 久祥さん

デザインするにあたり、一番に大同大学のバスと分かる、という事を念頭に置きました。そのために大学のロゴマーク・オフィシャルカラーを使用しました。ロゴマークと繋がったラインの積層デザインは、過去から現在にいたるまでの大同学生の努力の積み重ねとその努力が大同大学に注がれていく様を表現しています。

銅賞



情報学部
情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
野田 真平さん



情報学部
情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
伴野 翔さん



情報学部
情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
伴野 翔さん



情報学部
情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
伴野 翔さん



金賞

情報学部 情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
岡部 匠さん

私はバスを、これから大同の学生達が大同大学からしっかりと飛び立てる様に「飛翔」をコンセプトにしました。色には大同大学のイメージカラーである青と橙を使い、飛翔のイメージがしやすいよう、鳥を使ったデザインを行いました。



銀賞

情報学部 情報デザイン学科
プロダクトデザイン専攻4年
北村 勇貴さん

大同大学のロゴマークをモチーフに創立50周年を迎え、大同大学の更なる飛躍と発展の願いを込めて、広く他方向へ躍進していく波動をイメージした勢いのあるカラーリングにしました。

佳作



情報学部
情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
綾 優一さん



情報学部
情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
伊藤 舞さん



大学院
科目専攻修生
谷村 依子さん



情報学部
情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
丸山 祐樹さん



大学院
科目専攻修生
谷村 依子さん



情報学部
情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
丸山 祐樹さん



情報学部
情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
竹市 有里さん



情報学部
情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
丸山 祐樹さん



情報学部
情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
竹市 有里さん



情報学部
情報デザイン学科
メディアデザイン専攻4年
丸山 祐樹さん

アルバム委員会の学生による 撮影レポート

体育祭

10月19日(土)、20日(日)、学生会執行委員会主催の体育祭が開催されました。サッカー、バレーボール、卓球、ソフトボール、バスケットボール、テニスの6種目を予定していましたが、あいにくの天気で屋内の種目だけに。しかし、どの種目も白熱した試合を展開していました。私は卓球の撮影を行いました。手に汗握る展開とスピードに終始圧倒されていましたが、みなさんの生き生きとした瞬間を写真に取めることができたと思います。

バレーボール

- 1位 みやぶ君1号
- 2位 ちちきよ戦隊

卓球

- 1位 Tensegrity
- 2位 Shee pop!
- 3位 D@y Dream

バスケットボール

- 1位 あめんぼ
- 2位 負けん気強気番月
- 3位 バドぶら〜



レガッタ大会

11月3日(日)、今年もクラブ委員会主催のレガッタ大会が開催されました。レガッタ大会は本学の伝統行事であり、今年で50回目。雨天が心配されていましたが、幸いにも当日は晴天。クラブ参加18チーム、一般参加11チームの計145人が競技者として参加しました。チーム一丸となって一生懸命にゴールを目指している姿を見て、この大会を通してよりお互いの絆を深められたのではないかと思います。大会に参加した方々、応援していた方々も笑顔に溢れていてとても楽しそうでした。皆の思い出に残る素晴らしい大会になったと思います。

クラブの部

- 優勝 おかまはつらいよ(音楽研究部)
- 準優勝 DMSC(自動車部)
- 3位 チーム模型部(模型部)

一般の部

- 優勝 山田錦
- 準優勝 筋肉室
- 3位 サバンナ



ロボット研究部

小型ロボット競技大会で見事、優勝！ ロボ研3回目の快挙！！

ロボット研究部は、9月8日(日)に神奈川県川崎市産業振興会館で開催された第15回小型ロボット競技大会「BRAVE」に出場し、見事3回目の優勝を果たしました。

この競技は障害物が点在するおよそ2m四方のリングの中でロボット4台が同時に戦い、互いを転倒させる、もしくは場外へ押し出すなどして持ち点を奪い合う形式です。ロボットは大きさ60cm×30cm×21cm以下、重量1.5kg以下の制限があります。

出場ロボット20台によるトーナメント予選を勝

ち抜き、決勝戦では大同大学ロボット研究部と東京工科大学の対戦になりました。そして森健二さん(工学部 総合機械工学科 ロボティクス専攻2年)が「deadmau5」を操縦して優勝し、賞状(盾)と恒例の優勝賞品である玄米30kgを持ち帰りました。また、同級生の林秀行さんも優秀賞(第3位)を獲得しました。

今回の優勝は、ロボ研先輩の稲垣友喜さん(同4年)による第12回大会(平成24年3月)および第13回大会(平成24年9月)の優勝に続く快挙です。



イオンモール四日市北のイベントで展示・実演

8月4日(日)にイオンモール四日市北で開催されたイベント「ロボットワンダーランド」にロボット

研究部が参加しました。当日は格闘技ロボットと空中プランコロボットの展示・実演のほか、小型

二足歩行ロボットパフォーマンスショーやロボット操作体験も行いました。

ララスクエア四日市で開催されたイベントでも活躍！！

8月18日(日)、ララスクエア四日市で開催されたイベント「ロボ☆パーク」&「ロボ☆チャンプ」にロボット研究部の学生が参加しました。

ロボット操作体験やマイコンジョーギゲーム

大会など科学のおもしろさ、ものづくりの楽しさを体感してもらう「ロボ☆パーク」と、二足歩行ロボットによる白熱のバトルが繰り広げられた「ロボ☆チャンプ」の2つのイベントが行われまし

た。学生たちは、ロボット操作体験のスタッフとしてプレゼンテーションを行ったほか、自分たちが作ったロボットでバトルを披露しました。

男子ハンドボール部/女子ハンドボール部

東海学生ハンドボール秋季リーグで準優勝！



東海学生ハンドボール秋季1部リーグが終了し、本学ハンドボール部は男女ともに準優勝を飾りました。



男子ハンドボール部はチーム準優勝のほか、ベストセブンに田代息吹さん(情報学部 情報デザイン学科 スポーツ情報専攻4年)と蛇名将

飛さん(同3年)、得点王に杉山拓也さん(同4年)。ベストレフェリー賞に石川大介さん(情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻4年)、伊藤章裕さん(スポーツ情報専攻4年)のペアが選ばれました。

その結果、11月23日(土)～27日(水)に山梨県で開催された全日本学生ハンドボール選手権大会にも出場しました。

また女子ハンドボール部も5勝2敗でチーム準優勝を収め、全日本学生ハンドボール選手権大会へ出場しました。



学生の 勇姿!

情報学部 情報デザイン学科 プロダクトデザイン専攻

あいちトリエンナーレ 学生アートマーケットに出店

情報学部 情報デザイン学科 プロダクトデザイン専攻の学生有志が8月28日(水)から9月2日(月)までの6日間、「あいちトリエンナーレ 2013 学生アートマーケット」にブース出店しました。会場となった名古屋三越栄店7階特設会場には、アート・デザインを学ぶ愛知県内8大学のブースが立ち並び、個性豊かな手作りの作品が出品されました。

本学のブースでは学生考案のコースターやハンガーといった可愛らしく、ユーモア溢れる生活雑貨が人気を博し、特に女性客のハートを鷲掴みにしたようです。

ブースに立った学生たちも自分たちが作った商品がお客様の手に渡り、売り上げという結果

になって返ってくるという貴重な体験を通して、デザイナーを目指す者として喜びを実感していました。



本学学生たちは、6日間で558個の作品を売り上げ、8大学全体の売り上げ総数1,187個のおよそ半数を記録しました。



中部経済新聞に、産学連携プロジェクト「Xラーニング」が紹介されました

8月5日(月)の中部経済新聞に、2012年度から取り組んでいる産学連携プロジェクト「X(クロス)ラーニング」が紹介されました。

このプロジェクトは、建築、インテリアデザイン、プロダクトデザインの3専攻の学生と企業とがクロスし、新しい商品の開発を目指す取り組み。津島市に本社を置く板金加工メーカーの株式会社マウンテックと共同で行っています。

昨年度は17人の学生が参加。学科・専攻、学年もバラバラな学生たちを3つのグループに分け、グループごとに商品開発に取り組みました。工場見学に出かけ、抽象的だったイメージをより具体化し、金属の特性や使用場面、用途等も考えながら製品をデザイン。プロジェクトの

最後にはマウンテック社の関係者を前に、自分たちの考えたデザインを発表しました。厳正な審査の結果選ばれた作品は、製品化に向け現在検討中です。

そして、次のプロジェクトも、今年度は31人の学生が参加し、11月5日(火)に中間発表会を行いました。最終発表会は年明けに開く予定です。



▲中部経済新聞(8月5日)

9月16日(月)中日新聞

「命をつなぐプロジェクト」の取り組みが紹介されました

本学学生も実行委員として活躍している、企業や行政、地域、NPO、若者が協力しながら生物多様性向上や、次世代を担う若者の育成を目指して活動する「命をつなぐプロジェクト」。この取り組みが9月16日(月)中日新聞に

紹介されました。企業と連携して行っている、愛知県知多半島の工場群で企業の敷地の境を越えて生態系をつなぐ取り組みについて紹介されています。記事では、企業の境界のフェンスに穴を開け、動物の通り道を確保する「アニマ

ルパスウェイ」を提案した新里真弥さん(工学部 建築学科 土木・環境専攻2年)のコメントも掲載されました。

燃料電池研究センター／堀美知郎教授(工学部 機械工学科)

燃料電池講義を通して異業種交流を図りました

11月19日(火)に公益財団法人 名古屋産業振興公社 工業技術振興部が行っている異業種交流グループ活動の一つ、「テクノプラザナゴヤ08」の事業の一環で、会員企業の方々が燃料電池研究センターを見学。堀教授が燃料電池に関する講義を行いました。

今、中小企業ではコスト低減、品質向上、納期短縮に努めていますが、これらに加えて技術革新、製品の付加価値化、新製品開発などが求められています。日常の業務に追われ、技術革新や新製品開発までなかなか手が回らないのが実態のようですが、複数の企業がお互いの強みで既存ビジネスを補完しあい、さらに高

い技術や製品を持つ企業が連携して新製品を生み出す機会を作り出そうと、異なる業種の中小企業者が集まり、専門の知識や技術、市場等に関する経験や意見をお互いに交換するために定例交流会や見学会などを年に十数回、行っています。

今回の燃料電池講座にも多数多種の企業の方々が参加され、新鮮味のある講義となりました。



山田靖研究室(工学部 電気電子工学科)

「エレクトロニクス実装学会誌」に研究室が紹介されました

一般社団法人エレクトロニクス実装学会が発行している『エレクトロニクス実装学会誌 Vol.16 No.4(2013)』に、山田教授の研究室が紹介されました。

今回の記事では研究室の概要や特徴、研究テーマの内容について紹介されています。

山田研究室は、大学院修士課程3人、学部生12人。「本格的なEV(電気自動車)時代を見据えたエレクトロニクスの取組み」をメインテーマとし、EVインバータ用パワー半導体デバイスの実装やEV時代の自動車室内の換気制御について、研究に取り組んでいます。ほとんどのテ

マに関して、学外の研究機関と連携して進めており、学会の委員会や、産学官のプロジェクトにも参加し、最新の情報収集や発信を行っています。



嶋田喜昭研究室(工学部 建築学科 土木・環境専攻)

学術交流協定締結校 東亜大学校を訪問

8月30日(金)～9月2日(月)、嶋田研究室の学生4人と、堀内将人教授(土木・環境専攻)、大東憲二教授(情報学部 総合情報学科 経営情報専攻)、嶋田教授が学術交流協定締結校である韓国・東亜大学校を訪問し、学術交流を行いました。

学術交流では、東亜大学校の学生と釜山駅、釜山港、海上循環道路などを視察し、「釜山駅」の駅前広場の改修について、本学の学生が設計提案をし、ディスカッションを行いました。



高木基充研究室・渡部裕子研究室(情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻) 第22回SAVE MEポスター展に出品

グラフィックデザインを学ぶ中部の大学・短大・専門学校生たちのポスター展「第22回 Save Me Poster展」が、10月2日(水)から10月7日(月)まで、国際デザインセンターのデザインギャラリーで開かれ、高木研究室と渡部研究室の学生選抜により選ばれた10人の学生たちが出品しました。

この展覧会は、地球環境の保全・絶滅寸前の動物たちを守りたいという想いをポスターにして訴え続けてきたもの。学生たち一人ひとり、デザインの中にそれぞれのメッセージを強く込め、今考えなければならぬことをカタチにしました。



井藤隆志研究室(情報学部 情報デザイン学科 プロダクトデザイン専攻) 飛騨の家具フェスティバル 「森の手づくりマーケット」に出展しました



飛騨・世界生活文化センターで9月7日(土)、8日(日)の2日間開催された「2013 飛騨の家具フェスティバル」の「森の手づくりマーケット」に井藤研究室の学生4人が出展しました。

当日はあいにくの雨となりましたが、学生たちが一つひとつ心をこめて制作した作品は、来場者をはじめ他の出展者の人たちからも、非常に高い評価を受けていま

した。

こうした経験は学生たちにとっても大きな自信につながったようです。



元気の卒業生 東海ラジオ「らじおガモン倶楽部」に出演

②1

9月22日(日)東海ラジオ「らじおガモン倶楽部」(毎週日曜、8:10~8:25放送)に本学卒業生で、桃介橋の歩道照明を担当した若松寿さん(67E)が出演しました。らじおガモン倶楽部は、森本曜子客員教授(情報学部 情報デザイン

学科 メディアデザイン専攻)がパーソナリティを務めています。

若松さんは、大同大学の祖、福沢桃介ゆかりの橋である桃介橋の歩道照明を担当し、日本照明学会から「照明普及賞」を受賞しました。

若松さんは、桃介橋の歩道照明を担当した時の話や照明の世界に入ろうと思ったきっかけ、今後の目標について話しました。

情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻 オリジナル タイポグラフィポスター展を開催

10月28日(月)～11月8日(金)にA棟1階学生ホールにて、「情報演習IV」(渡部裕子講師担当グループ)を履修している学生が、オリジナルタイポグラフィポスター展を開催しました。

今回の課題は、オリジナル欧文フォント(書体)の制作と、それをギャラリーで発表するという、仮の企画の告知ポスター。学生たちは、講義の

中で、オリジナルアルファベット26文字の制作、B1サイズのポスター制作、展示設営に取り組みました。

今回は12月20日(金)から2014年1月10日(金)まで、展示を行う予定です。



光田恵研究室(情報学部 総合情報学科 かおりデザイン専攻)

「におい・かおり環境学会誌」に研究室が紹介されました

公益社団法人におい・かおり環境協会が発行している『におい・かおり環境学会誌 Vol.44 No.5/2013-SEPTEMBER(通巻No.231)』に、光田研究室が紹介されました。

光田研究室は、12人の学部生、2人の大学院生で構成されています。学内に設置されているにおい・かおり研究センターの研究ともかかわっており、学内だけではなく、他大学や企業の人たちと連携して研究を進めています。また、毎年におい研究交流会も開催。特別講演と1年間の研究成果発表を行っており、研究室の学生もこのにおい研究交流会で発表しています。行事も多く開催しており、毎月の親睦会やOB・OG

会、ゼミ旅行など、さまざまな行事を通して、交流を深めています。



情報学部 総合情報学科 かおりデザイン専攻

日本木工機械展 ウッドエコテック2013に出展しました



11月6日(水)～9日(土)、ポートメッセなごやで「日本木工機械展 ウッドエコテック2013」が開催され、かおりデザイン専攻3年生

が出展しました。

このイベントは、一般社団法人日本木工機械工業会が主催し、内外の優秀な木材加工機械・林業機械および木質系再利用機器ならびに関連製品等を一堂に展示・紹介し、木材加工機械産業ならびに環境産業の発展に寄与することを目的として開催。4日間で15,000人を超える参加者がありました。

かおりデザイン専攻の展示ブースには、本専攻の紹介やにおいの評価方法の説明パネルのほかに、嗅覚テスト体験コーナーや、木の種類

によるにおいの違いを知る体験スペースも設けました。ブースには、木材関係会社の方だけではなく、精神科医、製造業関連の企業関係者、アロマセラピーのインストラクターの方なども訪れ、学生たちはさまざまな職種の方と交流することができました。

今回の出展の中心メンバーの廣瀬正幸さん(かおりデザイン専攻3年)は、「イベントを通してさまざまな方とお話ができ、とても有意義な時間になりました。参加して初めて気付くことができた点もたくさんあったので、次の機会に活かしていきたいです。」と話していました。

情報学部 総合情報学科 経営情報専攻

授業「海外事情1(アメリカ短期留学)」の 報告会を開催しました



10月8日(火)、経営情報専攻2年生の授業「海外事情1(アメリカ短期留学)」の報告会を開催しました。経営情報専攻では、必修科目「海外事情1」で2年次の夏休みにアメリカ短期留学を全員が経験します。今年度は2年生26人が8月14日(水)からおよそ1か月間、アメリカ・オレゴン州立大学へ留学しました。

報告会では最初に、短期留学に引率した小澤茂樹准教授より、今回の短期留学の目的や成果、問題点、今後の対応についてなどの報告がありました。今回の短期留学は、英語のスキル向上だけでなく、異文化理解や自国文化の再認識、協調性や自立心を育むことも目的としています。

学生たちは、毎日の英語の授業だけではなく、少人数での会話練習や現地の人との交流を通して、英語の勉強に取り組みました。また、たくさんのアクティビティーも用意されており、ブルーベリー狩りやフットボール観戦、ラフティングなどさまざまな体験を通して、アメリカの文化について学ぶとともに協調性を養いました。小澤准教授からは、今回の留学を通して学生の英語スキルが向上しただけではなく、共同生活を通して学生同士で問題発見・解決できるようになったとの報告もありました。

報告会の後半では代表学生5人が英語でプレゼンテーション。学生たちは、写真や思い出の品を交えながら留学生活の中で経験したこと、

感じたことを報告しました。

短期留学最終日に現地でお世話になった人々へのお礼のスピーチを立候補し、務め上げた学生は、発表で「これまで積極性がない点が自分の弱みだと感じていたが、短期留学を通して積極的に人とかかわることができた、この経験を今後の生活にも生かしていきたい」と話していました。報告会の最後には、2年生から来年短期留学を控えた1年生に向けて、「不安もあるかもしれないが、良い経験になるので楽しんで欲しい」とのエールもあり、短期留学を通して大きく成長した2年生の姿を見ることができました。



不破勝彦研究室(情報学部 情報システム学科 コンピュータサイエンス専攻)

不破教授と大学院生が投稿した論文が 電気学会論文誌Cに掲載されました

一般社団法人 電気学会が発行している電気学会論文誌C(電子・情報・システム部門誌) Vol.133 (2013) No. 12 P2167-2175 に、不破教授と今年3月に大学院 情報学研究科 修

士課程 情報学専攻を修了した村山 聡さんらが投稿した論文「厳密な高域遮断特性を有する最適レギュレータ」が掲載されました。

この論文では、振動抑制を達成するための

高域遮断フィルタをフィードバック制御ループ内に含めても、ある評価関数のもとで最適な制御系を実現する設計アルゴリズムを提案し、実験によりその有効性を明らかにしました。

澤岡昭 学長

中日新聞でイプシロンについてコメント

8月16日(金)中日新聞に、イプシロンロケット打ち上げに関する澤岡学長のコメントが掲載されました。

記事では、8月27日(火)の打ち上げ予定日の前に、イプシロンロケットの開発、打ち上げに至

るまでの経緯やその間の研究者の絶え間ない努力について紹介されています。

宇宙開発委員としてイプシロンロケットの技術審査にも携わった澤岡学長は、今後のイプシロンロケットの可能性に期待するとともに打ち

上げの成功を祈って記事を締めくくりました。
このイプシロンロケットは9月14日(土)に打ち上げが成功しました。

日本テレビ『ZIP!』でコメント

8月28日(水)、日本テレビ系列『ZIP!』(毎週月～金、5:50～8:00放送)に澤岡学長が出演しました。テーマは27日(火)午後打ち上げ予定だった新型ロケット「イプシロン」。

澤岡学長は「世界のロケット打ち上げは価格

競争の時代に入っている」「イプシロンは小型衛星を低コストで打ち上げるために開発されており、これをきっかけに日本も宇宙ビジネスに本格的に参入できる」等、コメントしました。



小牧市まなび創造館で講演

9月21日(土)、小牧市まなび創造館あさひホールで「宇宙はすぐそこに ーはやぶさに続けー」と題して講演会が行われました。この講演会は、小牧市更生保護女性会が主催。およそ300人の聴講がありました。

学長は冒頭、日本中をハラハラ・ドキドキさせ

たイプシロンロケットの打ち上げについてのエピソードを紹介、講演の合間には国際宇宙ステーションから撮影されたオーロラや雷の動画を投影して小学生から高齢世代までの幅広い聴講者を魅了しました。



▲イプシロンロケット打ち上げの様子

韓山師範学院110周年記念行事に参加

澤岡学長は、学術交流協定締結校である中国広東省潮州市の韓山師範学院「110周年記念式典」に招待され、さまざまな行事に参加しました。

10月20日(日)には庄東紅副学長とともに、赤い花が咲く潮州の代表的な樹木「木綿(きわた)」の記念植樹を行いました。



▲澤岡学長(左)、庄東紅副学長(右)

日本マイクログラビティ応用学会 「第1回学会賞」を受賞しました

11月29日(金)、日本マイクログラビティ応用学会 創立30周年総会で、澤岡学長が「第1回学会賞」を受賞しました。

学長は日本が宇宙実験計画に着手した最初期から現在に至るまで30年を超える長きにわた

り宇宙環境利用科学の創始と発展に尽力しました。特に日本の有人宇宙実験ミッションの実施にあたっては日本初の宇宙飛行士の誕生をはじめ、スペースシャトル実験きぼう実験においては、研究者の育成および成果の応用利用に貢献し、

日本マイクログラビティ応用学会に大きな足跡を残しました。この長年の功績がたたえられ、今回の受賞となりました。



堀尾吉已教授(工学部 電気電子工学科)

第56回 表面科学基礎講座で講師を務めました

10月16日(水)、17日(木)に大阪大学で開催された「第56回 表面科学基礎講座」で堀尾教授が講師を務めました。

講座は表面・界面分析の初心者・若手研究

者・技術者を対象に、表面・界面分析の基礎と応用を解説することを目的として開催されました。堀尾教授が担当したのは2日目「表面回折手法(RHEED/LEED)」の講義。

入門的かつ具体例を豊富に挙げながら、回折法によって得られる原子配列周期や表面形態の概要について解説しました。

小森和武教授(工学部 総合機械工学科 機械システム専攻)

第21回鉄鋼工学アドバンストセミナーの講師を担当

10月24日(木)～26日(土)、かながわサイエンスパークで開催された、一般社団法人日本鉄鋼協会が主催する「第21回鉄鋼工学アドバンストセミナー」で、小森教授が圧延コースの講師を務めました。このセミナーは、10～15年の実務経験を持つ中堅技術者を対象とし、次代の鉄鋼業の担い手を育成することを目的としたもの。製鉄コース・製鋼コー

ス・圧延コースの3コースに分かれ、他社の技術者とのディスカッションを主体として行われました。

圧延コースは「棒・線における次世代製造技術」をテーマとし、11人の受講生が参加。小森教授は、「棒・線圧延の理論と実際」の講義を担当しました。



高木基充教授(情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻)

プサンデザインセンター開設40年記念展覧会に参加

プサンデザインセンター開設40年を記念して「Busan Design Association 40th Anniversary Exhibition」が、8月22日(木)から26日(月)まで韓国プサンデザインセンターで開催されました。韓国はもとよりシンガポール、エクアドル、アメリカ、イギリス、日本などで活躍しているグラフィックデザイナーが参加。

日本から招聘作家として、本学高木教授を含め、5人のデザイナーが参加しました。オープニングレセプションでは各国のデザイナーによるセミナーと併せて、会場にてオープニングパーティが賑やかに開催されました。



萩原伸幸教授(工学部 建築学科 建築専攻/インテリアデザイン専攻)

「巨大地震からわが子を守るタウンウォッチング・名古屋編2013」に参加

11月17日(日)、日本建築学会東海支部構造委員会主催の「巨大地震からわが子を守るタウンウォッチング・名古屋編2013」が名古屋市南区の千鳥コミュニティセンターで開催され、萩原教授が実施運営の担当として、また萩原研究室の学生もサポートとして参加しました。

このイベントは一般市民親子が建築学会の構造・防災の専門家とともにまちを歩き、地震等の災害時をイメージして危険箇所や利用可能な施設などをチェックしながら、地震防災について理解と意識を高めることを目的としています。

当日は小学校高学年の親子15組が参加し、班ごとに地図に気づいたことを書き込んだり、写真を撮ったりしながら町を歩きました。会場

に戻ってからはメモや写真をもとに防災マップを作成し、班ごとに発表の時間が設けられました。

発表では町を歩いてみて気づいた地域の特徴や、防災マップを作成するときに工夫した点などが紹介されました。



鷺見哲也准教授(工学部 建築学科 土木・環境専攻)

岩手めんこいテレビで岩手県大槌町での湧水調査活動が紹介されました

8月30日(金)岩手めんこいテレビ「Super NEWS(毎週月～金、16:50～放送)」、岩手県縁の“人”を紹介する「いわてケンミンFILE」のコーナーで、鷺見准教授が紹介されました。

鷺見准教授は、東日本大震災前から10年にわたり岩手県大槌町で水資源を調査しています。

放送では「湧き水博士」として登場。震災前は、主に大槌町内に生息する淡水魚「イトヨ」の生息環境の調査をしていましたが、町内にある

数多くの自噴井戸が、豊富な水資源として町民に活用されていることに大きな関心を抱き、水をどう使っていけるのかという観点では、その先の町づくりに貢献できるかもしれないと、自噴井戸の調査を始めました。調査の合間には地元ラジオ番組にも出演し、町民自身が大槌町の水環境を考えるよう呼びかけています。

鷺見准教授は「大槌にはこれがあるよと、外

に向けて町民の皆さん自身が言えるようになるということが、町の力になりますので、そういうことをどンドン、お互いに話をしながら、あそこにはあんなのがあるらしいとか、楽しみながら育てていっていただきたいと強く思います」と話しました。

映像はYouTubeからも見ることができます。

YouTube https://www.youtube.com/watch?v=Y_dJH4HEL4U&feature=player_embedded

9月24日(火)朝日新聞でコメント

9月24日(火)朝日新聞で、鷺見准教授が水害対策についてコメントしました。

名古屋市では、東海豪雨級の雨に備えて雨水をためるトンネルや地下池の整備を進めており、今年3月時点で市内86ヵ所(小学校プールおよそ2400杯分、およそ60万立方メートル)に

及んでいます。今後もさらに建設を進め、2018年度ごろまでにおよそ100ヵ所(およそ83万立方メートル)に増やす予定です。

このトンネルについて鷺見准教授は「名古屋市の地下トンネルは、短時間のゲリラ豪雨には効果的だろうが、長く降る場合などには限界が

ある。多様な水害のリスクを自治体が事前に住民に伝える仕組みを作る必要がある。」とコメントしました。

岩手県大槌町「デザイン会議」のアドバイザーに就任

東日本大震災で津波の被害を受けた岩手県大槌町の災害後の復興まちづくりを考える「デザイン会議」のアドバイザーに鷺見准教授が就任。10月17日(木)の第4回会議に出席しました。

鷺見准教授はこの町に特有の湧水や自噴井戸の災害前後の環境の研究に取り組んできました。住民代表者が参加する会議の地区ごとのワークショップでは、この町にある何を大切に、どのようなまちづくりをしていくかという議論

の中で、その知見と専門性を活かした助言・解説を行いました。

加藤和雄教授(工学部 建築学科 建築専攻/インテリアデザイン専攻)

「MESH環境デザインセミナー」特別講演にコメンテーターとして参加

11月26日(火)に愛知芸術文化センターで開催された「MESH環境デザインセミナー」特別講演に、加藤教授がコメンテーターとして参加しました。

このセミナーは、加藤教授が会長を務める環境提案協会・中部(MESH)の主催で、インテリア・建築・環境・プロダクトなどを学ぶ空間デザイン系の学生と若いデザイナーを対象として、年に数回開催されており、毎回日本を代表する空間デザイナーにご講演いただいています。

今回のセミナーでは、始めにインテリアデザイナー内田繁氏をお迎えして、「INTIMATE HOTEL」ホテルとデザインの新しい関係と題し

て講演が行われました。内田氏は、日本を代表するデザイナーとして商・住空間のデザインにとどまらず、家具、工業デザインから地域開発に至る幅広い活動を国内外で展開しています。2012年にオープン、内田氏が建築・インテリアデザインを担当した浅草の「ザ・ゲートホテル雷門」を例にしながらホテルデザインの過程やデザイン趣旨、デザインの力について講演が行われました。

その後、加藤教授と対談。ホテルデザインについて、さまざまな質問が交わされました。会場にはデザイン関係者、研究者、デザイナー、学生など60人が参加し、活発な交流が行われました。



杉本幸雄教授(情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻)

ドキュメンタリー映画 「四つの空 いのちにありがとう」を制作

名古屋のNPO法人「いのちをバトンタッチする会」が、病気や障害に向き合う四つの家族を取材したドキュメンタリー映画、「四つの空 いのちにありがとう」。この映画の監督を杉本教授が務めました。

「普通の家族が、困難に立ち向かい、乗り越えたり受け入れられたりしながら、しっかりと生きて

いる様子を記録したい」と、4組の家族に出演を依頼。昨秋から撮影を始めました。9月21日(土)に名古屋で初公開し、10月から全国30か所以上で上映会を開催しています。また、映像DVDなども有料でレンタルしています。この情報は、8月29日(木)の朝日新聞でも紹介されました。



杉本幸雄教授・小島一宏准教授(情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻)

小島一宏准教授の冠ラジオ番組に杉本幸雄教授が出演しました

10月26日(土)、東海ラジオ『小島一宏 一週間のごぶサタデー』(毎週土曜日、10:00~13:00放送)に、ドキュメンタリー映画『四つの空 いのちにありがとう』の監督を務めた杉本教授と、プロデューサーの鈴木中人さん(NPO法人いのちをバトンタッチする会代表)が出演しました。この番組は、本学教員の小島准教授が毎週パーソナリティを務めている冠番組。

放送では、映画制作のきっかけや4組の家族に向き合った取材エピソード、鈴木さんが続けている「いのちの授業」への思い、今回の作品への思いなどを語りました。杉本教授は、「この作品が、命の大切さ、家族を考えるきっかけにな

れば…」と話しました。今後もウイंकあいち(愛知県名古屋市)など、各地で上映される予定です。

詳細は、『四つの空 いのちにありがとう』ホームページ
<http://www.hm.aitai.ne.jp/~inochinokotodukuri/index.html>

小島一宏准教授(情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻)

毎日新聞で新作映画の紹介記事を担当

毎日新聞朝刊、「芸術食堂」のコーナーで新作映画の紹介を毎月第1・第3水曜日、小島准教授が担当しています。

10月23日(水)の記事では、25日(金)から公開の映画『グランド・イルージョン』を紹介。映画の見どころについて紹介しました。

また、小島准教授は毎日文化センター(名鉄

バスターミナル10階)で映画講座の講師も担当。毎月第4土曜日 17:30~19:00に「小島一宏の名作映画からのメッセージ 新旧シネマ・鑑賞のツボ」を開講しています。監督・俳優インタビューなど長年の蓄積をもとに、毎回おすすめの映画を詳しく分析。セリフやカメラワーク、伏線など、名画をより深く理解できるポイントやコ

ツを分かりやすくお話しします。10月26日(土)は、「風立ちぬ」。宮崎駿監督のアニメーションについて語りました。

講座のお申し込み・お問い合わせは毎日文化センター(TEL:052-581-1366)まで。

井藤隆志准教授(情報学部 情報デザイン学科 プロダクトデザイン専攻)

「デジタルものづくりと産業デザイン」 講演会の講師を担当

6月20日(木)、あいち産業科学技術総合センターで、「デジタルものづくりと産業デザイン」講演会が開催され、井藤准教授が講師を担当しました。

井藤准教授は、「デジタルものづくりで開く製品デザインの新たな展開」と題して講演。積層

造形等、最新の三次元造形技術やそのデザインへの応用について、紹介しました。その後、あいち産業科学技術総合センターの設備見学などが行われ、研究者や企業関係者など、100人以上が参加しました。



舟渡悦夫教授(情報学部 総合情報学科 経営情報専攻)

CBC『イッポウ』交通安全特集に出演しました

7月3日(水)、CBC『イッポウ』(毎週月～金、16:50～19:00放送)の特集に舟渡教授が出演しました。テーマは「事故多発 交差点の背景」。

10年連続、交通事故の死亡者数でワースト1を記録している愛知県。その内訳を見てみると死亡事故に限らず交通事故が多発している

交差点がありました。

番組では舟渡教授が実際に名古屋市を中心部にある交通事故多発交差点に足を運び、事故多発の背景をさぐりました。実際に交差点を見た舟渡教授は横断歩道の設置位置や交差点の間隔など道路のつくり注目し、どのような事故が起こりやすいか解説しました。



水野義雄教授(教養部 保健体育教室)

「命のフォーラム南」で講演しました

11月7日(木)、名古屋市南文化小劇場で「命のフォーラム」が開催されました。これは今年7月、名古屋市南区の男子中学生が自殺したことを受け、いのちの大切さを改めて考えてもらおうと、地元の南警察署と南区役所が開いたもので、中学生らおよそ340人が参加しました。

フォーラムでははじめに、およそ10人の中学生が代表として壇上に上がり、いじめをなくしていくことを宣言。その後、水野教授が青年期に

おけるいじめの問題についての事例を発表しました。水野教授は、「いじめを防ぐには、親や友人、それに教師とコミュニケーションをきちんと取ることが大切です。携帯電話のメールばかりでなく目と目をあわせて会話をするなどしたコミュニケーションを心がけてください」と話しました。

なお、このフォーラムの様子はNHKやCBC『イッポウ』(毎週月～金、16:50～19:00放送)

のニュースでも紹介されました。



岡田心准教授(情報学部 情報デザイン学科 プロダクトデザイン専攻)

共同でデザインを手がけたコミュニティサイクル「NITY」がグッドデザイン賞などを受賞

岡田准教授が共同でデザインを手がけたコミュニティサイクル「NITY(ニッティ)」が、公益社団法人日本サインデザイン協会 第47回SDA賞の最優秀賞、および公益社団法人日本デザイン振興会 2013年度グッドデザイン賞を受賞しました。

コミュニティサイクル「NITY(ニッティ)」は、街なかでも区別しやすいカラーリング、「電子マネー(交通系ICカード)」を用いた決済と個人

認証システムを構築することで、都市部での新たな交通手段として注目されているながら、未だ市民への浸透が浅いコミュニティサイクルの普及を目指した。デザインも、コミュニティサイクルは女性の利用率が高いということに着目し、女性がまたぎやすいフレームの形状や高さ、荷物を置ける荷台等、使いやすい工夫を施しました。

名古屋工業大学大学院伊藤孝紀研究室と

もにデザインを手がけ、今回の受賞となりました。



写真: 吉村昌也/コピスト

大東憲二教授(情報学部 総合情報学科 経営情報専攻)

本学でUNESCOの地盤沈下WG年次会議開催

10月23日(水)~25日(金)にUNESCOの地盤沈下WG年次会議が本学で開催されました。このWGでは、地下水、石油、水溶性ガス等の汲み上げや鉱物の採掘によって世界各地で発生している地盤沈下を沈静化させるための活動を行っています。

唯一の日本人WG委員として、大東教授が今回の日本で開催したWG年次会議の世話役を務めました。今回参加したWG委員は、メキシコから1人、オランダから2人、イタリアから2人、中国から2人。また諸般の事情で日本に来られな

かったアメリカ人のWG委員長が、インターネットを利用したスカイプで会議に参加しました。

2015年11月に、このWGが主催する「第9回地盤沈下に関する国際シンポジウム」が名古屋で開催されることになっており、今回のWG年次会議で、大東教授がこの国際シンポジウムのChairを務めることが正式に決まりました。24日(木)には、国際シンポジウム会場となる名古屋国際会議場を視察。また1960年から1990年までの30年間でおよそ1mの地盤沈下が生じた愛知県弥富市の農業用井戸の抜け上がり現

場も視察しました。

来年のWG年次会議は、オランダで開催されます。



岩橋尊嗣客員教授(情報学部 総合情報学科 かおりデザイン専攻)

NHK『NEWS WEB』に出演しました

9月19日(木)、NHK『NEWS WEB』(毎週月~金、23:30~24:00放送)に岩橋客員教授が出演しました。テーマは、「香りつき柔軟剤トラブル」。

岩橋客員教授は、海外製品が多く入ってきたことで、香りのレベルの強いものが受け入れられるようになった現状について指摘。

また、かおりの上手な使い方についても説

明し、「過度な使用に注意するべき。自分の香りが他人の迷惑になるということも考えながら使うべきだ。」とコメントしました。

フジテレビ『アゲるテレビ』

特集"柔軟剤のかおりで体調不良に?"に出演しました

9月23日(月)、フジテレビ『アゲるテレビ』(毎週月~金、13:58~15:30放送)に岩橋客員教授が出演しました。テーマは「柔軟剤のかおりで体調不良に?」。

現在ドラッグストアには25種類以上のかおり付き柔軟剤が並んでおり、「柔軟剤=かおり付き」といっても過言ではない状況となっています。おしゃれの一端として人気を集めるかおり付き柔軟剤ですが、その一方で柔軟剤のかおりによる体調不良を訴える相談も増加しているとのこと。

番組では「暮らしのかおりのエキスパート」として岩橋客員教授がゲストに招かれ、その現状

を解説しました。番組が150人を対象に行ったアンケートでは77%の人がかおり付き柔軟剤を使用していると回答。これに対して岩橋客員教授は、「かおり付き柔軟剤が日本に登場した当初はにおいのきつさから日本人にはなかなか受け入れられないのではと考えられていたが、実際に市場に出回ってみると徐々に消費者に浸透していった。しかし、においには好き嫌いの個人差があるため苦手意識やアレルギーが積み重なると吐き気や頭痛といった症状も現れることがある。」とコメントしました。さらに、「においやかおりで相手に不快な思いをさせる「スメハラ(スメル・ハラスメント)」についても紹介し、こう

いった事態に陥ってしまう背景には長時間同じにおいを嗅いでいるとにおいの感じ方が弱くなる「嗅覚の順応」があると説明しました。



酒井陽一教授(教養部 化学教室)

2014日本放射化学会年会・第58回放射化学討論会 大会委員長に就任

酒井教授が2014日本放射化学会年会と第58回放射化学討論会の大会委員長に就任しました。

日本放射化学会は放射化学及び関連研究のさらなる発展と活性化をめざして設立され、学術講演や会誌・会報の刊行を行っています。

上記の討論会は2014年9月に3日間開催し、200人以上が参加を予定しています。

梅田礼子准教授(教養部 外国語教室)

清須市生涯学習講座で授業を担当

9月6日(金)、13日(金)、20日(金)の夜3回にわたり、清須市の生涯学習講座で梅田准教授が「英語学習のヒント」と題して講座を行いました。

1回目は読解の仕方を解説、スキミングなどを実際に練習。初めての作業に戸惑う受講者も少しいましたが、皆さん積極的に取り組んでいました。2回目は英英辞書の使い方と多読の仕方の紹介。「鉛筆」など簡単な単語を自分で定義してみて英英辞書の定義と比べる練習では、皆さんユニークな定義をしていました。英英辞書が用意してあり、初めて使ったという方もいました。また、教室に多読に適した洋書が

難易度別にずらりと並べられ、受講者は興味津々で手に取って観察していました。3回目は実例で英文法の学習ということで、テレビドラマのセリフを利用して使役表現の勉強をしました。夜の講座だったためか予定より少ない11人の参加でしたが、質問しやすい雰囲気、活発に質問が出ました。質問からaとtheの違いの解説におよび、皆さん大変熱心に聞き入っていました。違いが分かりスッキリした表情でした。

講座の後には「ドラマで学習してみます」「学習のコツを聞いて励みになった」「多読にチャレンジしてみます」などの感想が寄せられました。



渡部裕子講師(情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻)

PIギャラリーの企画展に招聘され、出品

渡部講師が、金山にあるPIギャラリーの「2013夏の企画展」に招聘され、1ヶ月間という長い期間、『渡部裕子作品展』が行われました。

テーマは「色～その存在～」。空間にそびえたつ立体作品・額装平面作品・文字と写真の映像作品。多彩な見せ方をした空間では、モノクロームの世界の中にも、見え隠れする「色」が悠然と存在することにはたと気づかされます。数年前から発表している映像作品では、一字書と写

真を溶け込ませ、ゆらぎ、消失、連鎖など、情報と感覚を併せ持つ文字の存在感に圧倒されます。

中日新聞にも掲載されたこの展覧会、オープニングレセプションの日にはおよそ250人もの来場があり、ギャラリー会場は熱気に包まれていました。



日本人初! ホーチミンシティ(ベトナム)で行われた「JAPAN OSAKA」に招聘出演

日本とホーチミンシティ(ベトナム)が国交友好40周年をむかえ、その記念イベント「JAPAN OSAKA in ベトナム」(大阪府主催・フートー体育館にて)のステージで、渡部講師が文字のインスタレーション(ライブ書)を依頼され、招聘出演しました。

ベトナムにおいてこのような作品の発表をしたのは日本人初だそうで、ベトナムの人たちは食い入るようにできあがっていくその作品群を見上げていました。ステージのあとは、現地の学生たちと1つの作品を作り上げるワークショップを行い、ベトナムが50年前まで漢字を使用して

いたという事実を再認識し、それをもって作品を作り上げる楽しさを感じてくれたようです。

日本留学へのアピールも兼ねたこのイベント、会場には日本に関心をもつ2,000人近いホーチミン在住の学生たちが集まり、サイゴンニュース(現地新聞)にも取り上げられ、いま経済的に急成長を遂げるベトナムの日本や他国文化への関心の高さを表していました。





海外研修報告

松岡陽子准教授(教養部 教職教室)

韓国ソウル研修記：“二重の異文化”に身を置いて

韓国ソウルの中央大学校(文科大学・民俗学科/韓国文化遺産研究所)における約1年間の研修生活を終え、帰って参りました。ここでは、“二重の異文化”に身を置くことになったその生活を気楽に振り返りながら、ご紹介します。

渡韓前に同僚から繰り返し受けた質問に、“なぜ韓国なのか?”というものがありました。私が研修先に韓国を希望した理由は一言でいうと、日本と同じアジアの“似て非なる”文化圏に身を置いて、研究対象である親密な関係(特に親子)の日常の様々な姿を観察してみたかったということです。またそれには、フィールドワークと文化的コンテクストに基づいた分析で現象にアプローチする手法を発展させてきた民俗学の学科へ、ということで、学問分野の上でもあえて“異文化”に飛び込んでみることにしました。観察は市内の大規模な公園に通って行いました。後者の“異文化”(民俗学)の選択をそれに十分生かされたかどうか…心許ないところもありますが、学科の先生方や学生さんたちのおかげでもちろん多くの刺激を得られたことは確かです。とりわけフィールドワーク実習に同行させていただいたことは非常におもしろい経験とな

りました。

ところで、韓国では特に夏場、公園や校庭などで夜遅くまで大人たちが“井戸端会議”をしたり、幼児を遊ばせたりする場面を本当によく目にします。これは私が渡韓直後、非常に驚いたことの1つですが、こんなところにもあらわれている韓国の“宵っ張り文化”に影響され、私も平日はほぼ毎夜、韓国語教室に通ったり、研修先の先生の子どもたちにボランティアで日本語を教えたりと、“夜活”に勤しんでみました。韓国語は基礎レベルのまま現地へ飛び込んだため、社会人対象の語学教室には通おうと決めていたのですが、そこには“日本人の友達を作れるかも”という目論みもありました。しかし実際に行ってみると、クラスメートは私を除いて全員、西洋人…。初めはがっかりしたもの、けっきょく彼らとはよい友達になり、“韓国に暮らす西洋人”

の文化的生態を時々“参与観察”しながら学ばせてもらいました。こうして、キャンパスを離れても“韓国のなかの西洋”という二重の異文化のなかに期せずして身を置くことになったわけですが、彼らのなかには日本・中国での居住・ビジネス経験の豊かな人たちもいて、西洋人の視点から韓国と日本、中国の文化が対比的に語られるなど、実はけっこう勉強になったものです。

このように、私の研修環境にはやや特殊な面があったかもしれませんが、その分また様々な刺激と示唆を得ることができました。それらのなかには今後、自分でも意外な形で顕在化してくる部分もあるような気がしています。

こうした機会の実現をサポートしてくださったすべての方々へ、末筆ながら、心からの謝辞を申し述べ、終わりにします。ありがとうございました。



柳原克行准教授(教養部 人文社会教室)

海外研修近況報告／カナダ トロント大学

在外研究のため、4月よりカナダのトロント大学政治学部滞留しております。当地の専門家との交流から貴重な知見を得たり、北米第3位の蔵書量を持つ図書館を自由に利用できる環境のもとで、充実した毎日を送ることができております。

私のカナダとの「付き合い」は大学院生時代にまでさかのぼりますが、今回のトロント生活を通じて、この国が持つ魅力を再認識しています。民族・人種・文化・言語などに基づく集団間対立が世界各地で見られるなか、トロントは、むしろそうした多様性を積極的に受け入れ、それを活力源として発展を続けているということです。

今年5月に報じられたニュースを紹介しましょう。最新の国勢調査によると、カナダ全人口に占める「外国生まれ」の割合が20.6%(約680万人)にまで上昇したというものでした。今やカナダ国民の5人に1人は移民によって構成されていることとなります。

出身国として特に大きな伸びを示しているのが、アジア(中国・韓国)、中東、アフリカからの

移民、いわゆる「ヴィジブル・マイノリティ」と呼ばれる人々です。移民の多くは、トロント、モントリオール、バンクーバーの三大都市に集中し、これら三大都市では近い将来、こうした人々が白人人口と肩を並べるのではないかと予測されています。その最前線がまさにトロントです。最近5年間で10万人もの人口増がありましたが、そのうちヴィジブル・マイノリティの占める割合は実に49%におよんでいます。

注目すべきは、そうした集団がゲッター化するのではなく、社会の側にニューカマーたちを受け入れるノウハウが蓄積されていることです。たとえば、市が運営する英会話学校では安い授業料で移民対象の公用語習得のサポートを受けることができ、雇用支援も充実しているようです。また、約90におよぶ活気に満ちたエスニック・コミュニティが共存し、年間を通じて様々なエスニック・フェスティバルが開催され、民族間・人種間交流の場となっています。トロントは、グローバルな変化を先取りするとともに、それを利点へと転換させることに成功した、先進

的コスモポリタン都市であると言えるでしょう。この点は、『エコノミスト』誌の「世界で最も住みやすい都市ランキング」で常に上位を維持していることにも示されています。

同様のことはトロント大学にも言えます。ダウンタウンを中心に3つのキャンパスを擁し、世界中から集まった学生数は実に8万人を超えます。様々なエスニックの学生団体の催し物やフェスティバルが数多く開催され、キャンパスの彩りとなっています。また、国際教育センターには、ボランティアの講師によって運営される英会話や学習支援クラスなどもあり、留学生へのサポートも非常に充実しているようです。

様々な「違い」を認めつつ、いかにして「連帯」を作るか。これは政治学という分野における最大の課題でもあります。日本においてカナダの注目度は決して高いとはいえませんが、我々が学ぶべき多くの教訓を示唆してくれているのではないかと。晩秋のキャンパスを歩きながら、そうした思いを巡らせる毎日です。



「X4デザイン専攻・リレー展」

建築専攻／インテリアデザイン専攻展を開催しました

10月8日(火)～14日(月)、名古屋市東区にある市民ギャラリー矢田・第3展示室で「X4デザイン専攻・リレー展」建築専攻／インテリアデザイン専攻展を開催しました。

X4デザイン専攻・リレー展は、本学の4つのデザイン系の専攻である建築専攻・インテリアデザイン専攻・メディアデザイン専攻・プロダクトデザイン専攻が、それぞれの専門分野の魅力を広く学外の人たちにも知ってもらいたいという思いで、昨年からのスタートした展覧会です。

今回の建築専攻／インテリアデザイン専攻展は、「未来に挑む建築」がテーマ。社会人、大学生・高校生、芸術関係者、デザイン関係者など、計375人が来場しました。10月13日(日)にはCCDO(中部デザイン団体協議会・会長)の安藤清会長も来場され、熱心に全作品について質問。学生に対し、熱いメッセージを語られました。



株式会社マウンテックとの産学連携プロジェクト「Xラーニング」中間プレゼンテーションを実施しました

11月5日(火)、昨年度から実施している株式会社マウンテックとの産学連携プロジェクト「Xラーニング」の中間プレゼンテーションを行いました。このプロジェクトは、工学部建築学科建築専攻とインテリアデザイン専攻、情報学部情報デザイン学科プロダクトデザイン専攻の学生が、企業と連携して画期的な商品の開発を目指すもの。昨年からの引き続き、高い加工技術を持つ板金メーカー・株式会社マウンテック(本社:愛知県津島市)と連携し、商品開発に取り組んでいます。

1グループ8人程度で3つのグループに分か

れ、課題に取り組みました。中間プレゼンテーションでは、株式会社マウンテックの山田専務らに対して、自分たちが考えた製品についてスライドや模型を使いながら発表。各チーム、室内用シーソーやテレビボード、照明器具、防犯グッズなど材料の特性を考えながらさまざまな製品アイデアを発表しました。山田専務らは、1つひとつのデザイン提案に対して丁寧にコメント。まだ世の中にないものか、ターゲットはどれかなどの質問がなされ、学生のアイデアを作品・カタチ・商品にしていくためのアドバイスをさせていただきました。

学生たちは今回のアドバイスをもちに、年明けの最終プレゼンテーションに向けて、デザイン・アイデアを磨き上げていきます。



高大連携

大同高等学校PTA主催 本学見学会が開催されました

7月6日(土)、大同大学大同高等学校PTAの主催により、見学会が開催されました。子どもとの進路選びの相談やアドバイスのために、保護者の方々は学科・専攻の内容や教育施設などの説明、また就職状況などについて熱心にメモを取っておられました。

今回は、およそ90人の方が参加されました。機械系、電気電子・情報システム系、建築・土木系、デザイン系、かおり系、経営情報系、教育施設見学の7コースからの希望に応じて、実施されました。

昼食後のアンケートには、「理工系人気と聞いていましたが、今日の内容紹介や実験施設を見て納得できました」「自分は文系の大学だったので、理系の大学の見学は新鮮だった」「先生の指導方針を聞き、安心して子どもに勧めることができました」「案内してくれた学生が大同高校の卒業生だったので、大学生活に関する生の声を聞くことができ良かった」「とても内容が良かったので、来年は他の系統を見てみたい」などの感想が寄せられていました。



